

平成30年6月8日現在

機関番号：95401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26780300

研究課題名(和文) 沖縄の暴走族・ヤンキー若者たち、その後 5年にわたる参与観察と生活史調査から

研究課題名(英文) Okinawan Joyrider and Lads, and Their Lives There After: Through Participant Observation and Life History Research over Five Years

研究代表者

打越 正行 (UCHIKOSHI, MASAYUKI)

特定非営利活動法人社会理論・動態研究所・研究部・研究員

研究者番号：30601801

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、沖縄の下層若者を対象とする追跡調査である。調査を始めた2007年、沖縄の暴走族・ヤンキーの若者の多くは、家族関係が不安定で、中学にほとんど通学しておらず、安定した仕事に就いていなかった。彼・彼女らがその後、誰と、どこで、どのようにつながり、そこでどのような経験を重ねたのか、そして現在の仕事と生活について追跡調査することが、第1の課題である。続いて、そこで明らかになった沖縄の下層若者の仕事と生活の実態を分析するための概念や枠組みを構築することが、第2の課題である。

予定していた参与観察、生活史調査は順調にすすみ、その成果は学会報告、論文、書籍として公開した。

研究成果の概要(英文)： This is a follow-up study of lower-class youth in Okinawa.

In 2007, when the initial study commenced, many delinquent young people ("motorcycle gangs" and "Yankees") in Okinawa had unstable family relationships, hardly attended their junior high school, and rarely had stable employment. The first aim of this study is to trace these people to find out to whom, where, and how they have been connected since then, what kind of experiences they have accumulated, what kind of work they do, and what kind of life they lead now. The second aim is to construct concepts and frameworks in order to analyze the reality of the work and life of lower-class youth in Okinawa that has been revealed through research.

Planned participant observation and life history research are progressing well, and the findings have been published as conference presentations, articles, and books.

研究分野：社会学

キーワード：暴走族 ヤンキー 沖縄 参与観察 生活史 地元 貧困 若者

1. 研究開始当初の背景

日本本土において、暴走族は1970年代に誕生し、その活動は80年代に絶頂にあった。その様子は、多くのドキュメンタリーや写真集、そして社会学者・佐藤郁哉の参与観察によって記録、研究されてきた(『暴走族のエスノグラフィ』1984年)。しかし1990年代以降は、暴走族を対象としたドキュメンタリーも学術研究も、ほとんど行われていない。暴走族は、現代日本の下層若者の代表的なサブカルチャーであるにもかかわらず、その実態を把握する作業、なかでも彼・彼女らの生活や仕事に入り込む参与観察によるデータの蓄積が乏しい現状であった。

それに対して本研究は、沖縄の暴走族・ヤンキーの若者を対象とした参与観察を実施する。それには、2つのねらいがある。1つ、日本社会における沖縄の周縁性と、そこに生きる下層若者の文化との関係を分析すること。彼らの文化には、沖縄の歴史と構造が入り込む。その様子を描き、分析する。2つ、それらの若者たちが仕事を探し、生活を営む際に重要となる地元つながり(地域ネットワーク)の機能を分析すること。このつながりは、沖縄固有のものとして描かれることが多いが、その実態について調査を通じて明らかにする。

本研究は、(階級、エスニシティなどの)周縁世界について綿密なフィールドワークを行い、現代社会批判を行ったカルチュラル・スタディーズの系譜に位置づけられる。なかでもポール・ウィリスの『ハマータウンの野郎ども』(1977=1996年)は、本研究にとって重要な先行研究である。ウィリスは、1970年代のイギリス労働者階級の再生産と抵抗文化について記述した。彼は、ブルデューらが『再生産』(1970=1991年)で指摘したような、いかに労働者階級出身の「野郎ども」が再生産過程に巻き込まれるかではなく、なぜ野郎どもは階級の再生産を結果と押し進める製造業へと積極的に就こうとするのかを考察した。このように問うことで、野郎どもの文化が、その再生産過程でいかにきいているのかをみるのが可能となった。本研究は、沖縄の周縁性とそこに生きる下層若者の地元つながりが相補しあう過程を分析するが、そこで文化の役割に注目するのは、この先行研究によるところが大きい。計画通りに研究が遂行されれば、沖縄の土着の若者文化を対象とするカルチュラル・スタディーズと位置付けられ、その意義は大きいと考える。

2. 研究の目的

本研究「沖縄の暴走族・ヤンキー若者たち、その後——5年にわたる参与観察と生活史調査から」は、2007年から継続している沖縄

の下層若者を対象とする追跡調査である。

2007年当時、沖縄の暴走族・ヤンキーの若者の多くは、家族関係が不安定で、小学校・中学校に通学した実績がほとんどなく、安定した仕事に就いていなかった。彼・彼女らが、その後の5年間(2012年から2016年)で誰とどのようにつながり、どのような経験を重ねたのか、そして5年後にどのような仕事(違法就労を含めて)に就き、どのような世界に住んでいるのかについて追跡調査することが、第一の課題である。

課題1 2007年当時に暴走族・ヤンキーであった若者たちが、その後の5年間で、どこで何をしていたのか、彼らの移動や職業選択、人間関係には、どのようなメカニズムが働いているのかについて、エスノグラフィとして記述する。

続いて、そこで明らかになった沖縄の下層若者の仕事と生活の実態を分析する概念や枠組みを設定することが、第二の課題である。

課題2 課題1により蓄積されたデータを分析するための概念と枠組みを設定する。

以下では、これらの課題を解決するための研究の方法と調査の概要について述べる。

3. 研究の方法

申請者は、2007年から2013年まで、沖縄において暴走族・ヤンキーの若者を対象とした調査を行っていた。2007年には、166名の暴走族とその周縁の若者への聞き取りを行ったが、2013年においても、その内の123名の若者と連絡を取り続けており、継続調査が可能な状態にあった。そのようなラポールに基づいて本調査はすすめる。

また、関係を維持できた暴走族のなかで、私は「使いパシリ(先輩の雑用係)」として、彼・彼女らとともにさまざまな活動を行ってきた。そこでは暴走族に入ったばかりの新参者と同じように、申請者も年下の「先輩」に従った。それは、可能な限り申請者の視点、身体感覚などを、調査対象者のスタイルに近づけようとするためにとった役割であった。調査方法として参与観察を採用したのは、それがデータ蓄積の乏しい研究対象について、まずは仮説索出型の方法が有効であると考えたためである(調査方法については、研究業績⑩、⑪、⑫を参照)。

これまでの調査でつくられたラポールに基づいて、2014年度は、対象となる若者たちの追跡調査を行った。参与観察を行いながら、同時進行で、1人ずつの生活史インタビューも行った。2015年度以降は、おもにその成果を整理、執筆することを中心とした。調査も引き続き行い、同時に前年度調査の成果の発表に向けての読み合わせ、データ修正・追加

も行った。2016年度、2017年度は、それらの成果を調査対象者に対して報告し、そのうえで、成果を公開・発表した。

本研究は、参与観察と生活史インタビューを同時に行ってきたが、中途段階の2014年から生活史調査を始めた点も、調査が順調に進む要因となった。調査対象者の多くは、活字文化や、ある出来事について執拗に聞かれたり、数時間にわたりインタビューを受けることに慣れていない。ゆえに、上述したようなラポールを活用して、それぞれ調査対象者の特徴を把握したうえで、適切なタイミングで、インタビューをすすめた。

続いて、調査概要について記す。

研究概要

【2014年度】

沖縄での継続調査①

・生活史調査

(1) ギャンブル系の違法就労に就いている20歳前後の男性たち(南部市町村のファーストフード店)

(2) 違法性風俗店を経営する20代前半の男性(中部の繁華街)

(3) キャバクラ店で働く10代の女性たち(北部の喫茶店)

(4) キャバクラ店で働く20代前半の女性たち(那覇郊外市町村の喫茶店)

上記の調査対象者に、それぞれ少なくとも2回は調査を実施した。2回目の調査時に、1回目の録音データを文字化した書類を持参し、事実確認やデータの深化を行った。地元つなぎりと就労実態を中心とした聞き取りを行った。

・参与観察

(1) 建築業に就いている10代から20代の男性たち(沖縄県内の建築現場)

(2) 不安定就労状態にある20代前半の男性たち(那覇郊外市町村のバイク倉庫)

参与観察は、建築現場で調査対象グループと同じ班に所属して作業しながら、建築現場での働きぶりやそこでの役割、地位、上下関係等を、1カ月から2カ月にわたり調べた。

オートバイの倉庫では、調査対象グループの新参者に与えられる役割であるパシリ(使い走り)として、同様に、集団内の人間関係、役割分担、権力関係と、それらによって獲得する仕事、仕事の情報・技術等を調べた。

【2015年度】

沖縄での継続調査②

上記のすべての調査対象者に対して、継続調査を進める。

【2016年度、2017年度】

沖縄での継続調査③

報告書、論文の執筆

沖縄での原稿読み合わせ

読み合わせとは、原稿発行前に調査対象者と書いたものをその場で読みながら最終確認をすすめることである。

研究代表者の転職により、研究期間を1年延長したが、予定していた調査は順調に進み、その成果も公開することができた。

4. 研究成果

本研究は、沖縄の若者文化、なかでも暴走族やヤンキーの若者を対象とした若者文化研究として始めた。その後、バイクに乗ったり、それを見物していた男性の若者の多くは、

(1) 建築業 (2) 性風俗業 (3) 違法就労の3つの仕事に就いた。そして、その職業の移行過程で強い役割を果たすのが「地元つなぎり」であった。ここでいう地元つなぎりとは、中学の先輩-後輩関係にもとづき、卒業後も生活、就労、余暇などをともにするつながりのあり方をさす。都市部で流動的な雇用や個人化した生活のあり方が指摘される一方で、沖縄の下層若者の地元つなぎりは、非移動で強固なものであった。このように下層若者は、産業構造や地域性をめぐって、生活や雇用の在り方は大きく異なる。そのような視点から、沖縄の下層若者を対象とし、地元つなぎりの現況、また建築業の再編ともなう地元つなぎりの動態について調べ、考察した。このように本研究の射程は、若者文化にとどまらず、移行過程、労働、共同体、貧困を主題とする社会学研究へと展開することができた。

なお本研究は沖縄の貧困についての論考(研究業績⑬、⑭)や、社会学の貧困研究のレビュー(研究業績②、⑥、⑦、⑫)といったものを基盤としている。また本研究の主題からは外れるが、周辺層の女の子たちへの調査、研究も同時にすすめた(研究業績③、⑧)。

以下では上述した課題に沿って、研究成果について述べる。

課題1

沖縄の下層の男性の若者は、中学卒業後に地元つなぎりによって、職業世界へと移行した。彼らは、地元の先輩たちが就いている建設業、性風俗業、違法就労に、それぞれ分かれていった(研究業績④、⑨、⑪、⑬)。

なかでも建設業の若者は、厳しい上下関係である「しーじゃ(先輩)・うっとう(後輩)」関係にもとづいて働き、そして生活した。それは往々にして、略奪や暴力を含む過酷な関係であった(研究業績⑤、⑩)。そのような関係は、10代の下積み期間だけではなく、30代にまで拡大し、また仕事の場面だけでなく生活や遊びの時間にまで及んでいた(⑬、⑱)。

エスノグラフィで主に描いたことは、彼らが生きる地元社会には厳しい上下関係や暴力があるということである。しかし、それは無秩序になされることではなく、ある秩序のもとに行われることであった。そして、それ

らの関係が形成され、暴力が生じる過程を彼らの生活や仕事の文脈から記述した。

課題2

エスノグラフィの記述を通じて、立てた問いは、「なぜ下層若者は仕事と生活の面で過酷さをまず地元社会にいつづけるのか」である。

彼らが生きる地元は、暴力的な強いつながりがでがんじがらめになるという「集団化」と、移動が制限されるという「固定化」を特徴とする。そこでは、暴力や職業選択の不自由さがある。それにもかかわらず、彼らは地元に残る。その理由にせまるために、地元を「下層若者が相互に全人格的に関わる社会の基盤」と定めて考察をすすめた。

一つ目の要因としては、地元を通じて、下層労働の再生産が展開されることがあげられる。沖縄の下層若者はさまざまな資源をえるために地元を集まる。それと同時に、彼らは地元拘束される。地元の相互に全人格なつながりによって、彼らは下層労働に適合的な働き方を身につける。地元は彼らの生活世界であると同時に、苛酷な下層労働への供給源となっていた。

二つ目の要因としては、地元を通じて、下層若者文化は再編されることがあげられる。彼らの生き方としての文化には、略奪や暴力が含まれる。下層労働世界が過酷になるなか、彼らの文化もその影響を受ける。略奪や暴力は、その対象が拡がり、年を重ねても終わる見通しがたたない。それによって、彼らの生活はますます過酷になるが、そこでは関係が途絶えたり、彼らのやり方そのものが壊れたりすることはなかった。むしろ、つながりはより強まり、暴力を用いてでも関係の維持がなされていた。

このように彼らのつながりのあり方は、沖縄的共同性として描かれる互惠的な「ゆいまーる（相互扶助）」ではない。彼らのつながりは生活資源にもならないし、生活のきびしさを和らげる緩衝材としても、役に立つものではない。沖縄の下層若者たちは、まず地域の共同体から排除される。そして彼らはその状況を生き延びるために、ある種の共同体を自分たちで新たにつくろうとするのだが、それは彼らにとっては拘束として機能する。たとえば、ゆいまーるやエイサーの青年団などの共同体から排除されている。さらに、中間層にみられるような商売上のつながり、親族の集まり、地域の友だち集団からも距離を取られている。同時に、彼らは、仕事の現場でも生活でも、たとえば、先輩と後輩のような縦型の人間関係に強く拘束されている。その人間関係にある限り、将来もそこにとどまり続けることになる。

地元の暴走族で活動し、建設業に働く先輩たちは、暴力トラブルを繰り返すことで地元社会から排除された。また彼らは建設業で一人前になっていくというライフコースから

も外れた。つまり彼らは地元社会に流れる時間からの排除を経験したのである。これを〈共同体からの排除〉とした。

このような状況で、先輩のグループは自分たちだけで、もうひとつの共同体を作り上げた。孤立していった彼らは、今まで以上に互いの結束を強固なものとしていった。そして地元の後輩は、徐々に暴力のターゲットとなっていく。建築現場で、またその後に仕事を辞めた後にも、地元の先輩たちから拘束されていく。仕事を辞めても後輩のパシリとしての役割は終わらなかった。それは10代の頃の終わりのみえる拘束とは異なる、終わらないパシリの現状であった。この排除された者が相互に強くつながりあうプロセスと、先輩が後輩を支配下につなぎとめておくことを、〈共同体への拘束〉とした。

両者に共通しているのは、時間感覚の欠如である。時間感覚があるとは、まず将来への見通しがあることである。今だけでなく、将来にわたって時間に幅のある視角をもって働く、生活を営むことを指す。またそれは出来事が通過儀礼として機能することである。ライフステージをのぼっていく際に、時を刻んで今までとこれからの生活や自己、地位などを自覚する機会がそれによって生じる。そのような機会が、彼らには乏しかった。

継続調査で明らかになったことは、沖縄の下層若者の一部が時間感覚を基礎としたライフコースから排除されているという事実である。2013年にはそのような時間感覚を習得できない若者が目立った。この実態を「終わらないパシリ」として描いた(研究業績⑩)。

ここで重要なことは、この先輩と後輩の上下関係は沖縄に固有の本質的な文化ではないということである。建設業の社会内部における特定の歴史と状況を生きるなかで形成されたものである(研究業績⑪)。

地元という相互に全人格的に関わりあう社会の基盤の存在が下層若者の仕事と生活を成り立たせてきた。よって仕事と生活が過酷さを増したとしても、仕事を変えたり生活の基盤となる人間関係を変えたりするのではなく、地元を基盤とする全人格的なつながりの中で過酷な状況に対処しようとする戦術がとられた。このように、仕事と生活を同じ人間関係で長年にわたり積み重ねてきたために、彼らは地元に残り続ける道を選んだのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

① 打越 正行、つくられたシージャ・うっとう関係——沖縄建設業の戦後史、部落解放研究、査読有、24号、2018、pp. 47-67

② 宮内 洋、松宮 朝、新藤 慶、石岡 丈

昇、打越 正行、貧困調査のクリティーク (3) ——『まなざしの地獄』再考、北海道大学大学院教育学研究院紀要、130号、2018年

- ③ 打越 正行、夜から昼にうつる——ライフステージの移行にともなうつながりの分化と家族像、東海社会学会年報、10号、2018年
- ④ 打越 正行、沖縄の下層若者と〈地元〉の社会学——下層労働の再生産と下層若者文化の再編、首都大学東京大学院人文科学研究科提出博士論文 (人博90号、博士：社会学、2016年)
- ⑤ 打越 正行、暴力を飼い慣らす——沖縄の下層若者の生活実践から、生活指導研究、32号、2015年、pp. 13-23
- ⑥ 宮内 洋、松宮 朝、新藤 慶、石岡 丈昇、打越 正行、貧困調査のクリティーク (2) ——『排除する社会・排除に抗する学校』から考える、北海道大学大学院教育学研究院紀要、122号、2015年、pp. 49-91
- ⑦ 宮内 洋、松宮 朝、新藤 慶、石岡 丈昇、打越 正行、貧困調査のクリティーク (1) ——『豊かさの底辺に生きる』再考、北海道大学大学院教育学研究紀要、120号、2014年、pp. 199-230

[学会発表] (計3件)

- ⑧ 打越 正行、夜から昼に移る——ライフステージの移行にともなうつながりの分化と家族像、第10回東海社会学会、2017.7.8、名古屋大学 (愛知県)
- ⑨ 打越 正行、沖縄の共同性の外部に生きる若者たち——暴力の日常と時間/空間感覚、第23回子ども社会学会、2016.6.5、琉球大学 (沖縄県)
- ⑩ 打越 正行、暴力を統制する——沖縄の下層若者の生活実践から、第32回日本生活指導学会、2014.8.29、沖縄大学 (沖縄県)

[図書] (計8件)

- ⑪ 打越 正行 他、ナカニシヤ出版、フィールドで学ぶ地域社会——現代を生き抜くために、2018年 (校正中)
- ⑫ 打越 正行 他、ナカニシヤ出版、沖縄の階層と共同体、2018年 (校正中)
- ⑬ 打越 正行、筑摩書房、地元を生きる——沖縄ヤンキーのエスノグラフィ、2018

年 (校正中)

- ⑭ 打越 正行 他、北樹出版、いろいろあるコミュニケーションの社会学、2018年
- ⑮ 打越 正行 他、かもがわ出版、沖縄子どもの貧困白書、2017年、288 (169-174)
- ⑯ 打越 正行 他、ナカニシヤ出版、最強の社会調査入門、2016年、246 (86-99)
- ⑰ 打越 正行 他、太田出版、at プラス——思想と活動、29号、2016年、168 (110-127)
- ⑱ 打越 正行 他、ミネルヴァ書房、持続と変容の沖縄社会——沖縄的なものの現在、2014年、320 (108-131)

[その他]

ホームページ等

⑲ 打越正行の研究室
<https://blog.goo.ne.jp/uchikoshimasayuki>

⑳ 打越正行の研究室 (倉庫)
<https://uchikoshimasayuki.jimdo.com/>

㉑ 現代ビジネス著者ページ
<http://gendai.ismedia.jp/list/author/masayukiuchikoshi>

㉒ インタビュー記事 (シノドス)
<http://synodos.jp/society/19337>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

打越 正行 (UCHIKOSHI, Masayuki)
特定非営利活動法人
社会理論・動態研究所・研究員
研究者番号：30601801